

## 鉄凝の文化的融合と文学的追求について

李 繼凱<sup>1</sup> 著 高 芳 訳

### 要旨

古今東西の文化が現代に溶け合う過程には、さまざまな形態の文化的融合が貫かれています。近代以降、多くの文化人や著名な作家たちは、この文化的融合の中で自らの文化観や価値観を形成し、文学的な追求を展開してきました。鉄凝もその一人です。彼女は歴史の新時代や新世紀において、古今東西の文化的融合を通じて独自の文学的追求を展開し、「三立」の人生観と文学世界を創出・形成し、中国現代文学を代表する象徴的な作家の一人となりました。鉄凝は、接触した古今東西の文化思想資源を継続的に受け入れ、創造的な融合と統合を経て、自身の芸術観を確立し、多くの逸話として語り継がれる文学的追求を展開しました。明らかに、単一の文化資源では、豊かで卓越した鉄凝は生まれませんでした。多元的で多様な文化の出会いと融合こそが、鉄凝を成就させたのです。彼女が「世界文学」を徐々に受け入れる過程で、同時に世界へと歩みを進めたのです。また、彼女の成長過程は、読書による励ましや創作を通じた社会貢献の意義に満ち、心を広く持ち、寛容であることの重要性を示唆しています。

**キーワード：**鉄凝、文学的追求、文化的融合、「三立」の人生、世界文学

鉄凝は、中国現代文学の優れた作家であり、芸術分野における名実ともにリーダー的存在で、世界的にも一定の影響を持つ文化人である。彼女は、古今東西の文化が交わり育まれた、いわば「文化的鉄凝」または「鉄凝現象」の体現者であり、その独自性によって中国現代の知識人を代表する地位を確立した。学歴こそ高くないものの、鉄凝の実力は際立っており、身長は小柄ながらも成し遂げた業績は非常に大きい。彼女は中国現代文学と文化の発展において重要な役割を果たし、その学ぶ意欲、観察力、物語を紡ぐ力、多才多能なエネルギーは驚嘆に値し、多くの称賛を集めている。筆者は、古今東西の文化が現代に融合する過程には、さまざまな形態の文化的融合が存在すると考える。近現代の多くの文化人や著名な作家たちは、こ

1 李繼凱，中国陝西師範大学文学院教授、人文高等研究院首席専門家，中国現代文学研究会副会長，中国国家社会科学基金学科計画審査グループの専門家。

の文化的融合の中で自身の文化観や価値観を形成し、文学的追求を進めてきた。鉄凝もその一人であり、「後古代」とも言える新時代や新世紀において、古今東西の文化的融合を通じて独自の文学的探求を展開し、「三立」の人生観と文学世界を築き上げ、中国現代文学を象徴する代表的な作家となった。鉄凝は、古今東西の多様な文化思想資源を受け入れ、それを創造的に融合・統合することで、自身の芸術観を確立した。その結果、多くの逸話として語り継がれる文学的追求を続けている。明らかに、単一の文化資源からは、豊かで卓越した鉄凝のような人物は生まれなかった。むしろ、多元的で多様な文化の出会いと融合こそが、鉄凝を成就させたのである。彼女は「世界文学」を徐々に受容する一方で、同時に世界へと歩みを進めた。その成長過程には、読書を通じた励ましや創作を通じた社会貢献の意義が含まれ、さらには心を広く持ち、寛容であることの重要性を示している。

## 一、融合と成長：鉄凝の知識の蓄積と文学的追求

本稿で述べる「融合」とは、主に文化的な融合を指す。「文化融合論」は、文化の発展や創造の法則を明らかにするものであり、文化の違いを認識し、平等な立場で融合を進める必要性と意義が強調される。世界の偉大な作家たちは、文化的な融合を通じて知識を蓄積し、作家としての才能を磨き上げ、古今東西の多様な文化的要素の中から自身に適した文学観や表現方法を追求してきた。鉄凝の文壇での台頭も、文化的融合の中で自己を築き成長した結果である。

筆者はかつて、アメリカの『東西方思想雑誌』特集号「文化磨合視域中的東西方文學」<sup>2</sup>の編集に招かれた際、序言で次のように述べた。東西の文学・芸術は、この小さな地球上で生まれた人類の文化的創造の産物であり、それぞれの違いを超えて、交流・対話・相互理解を進めることが重要である。歴史・地理・言語・文化・心理といった相違点を認識しつつ、それらを超えた共有の可能性を探る姿勢が求められる。

この文化的対話や発展の過程こそが、異なる文化間の「文化融合」のプロセスそのものである。「文化融合論」は、多元的文化や異質文化同士の相互作用、適応、一致、調整を重視し、文化の主体性や差異性を尊重しながらも、共通性や調和性を追求する。その視点から国際政治、人類の運命、文化交流、家庭やチームに至るま

2 筆者が編集長を務めた『東西方思想雑誌』(The Journal of East-West Thought) 2023年夏號：「文化的融合の視点から見る東西文學」(East-West Literature in the Perspective of Cultural Crossvergence)を参照。

で、多くの対立や苦境を乗り越える可能性が見いだせる。

文化融合は「異なれども和する」という精神に基づき、多様性の共存や相互利益の実現を目指す理想的な考え方である。同時に、現実的な側面も持ち合わせており、私たちは日々の生活の中で「融合関係」に直面している。この中で現実的かつ効果的な融合を通じ、多様な「運命共同体」を築くことが可能である。とはいえ、理想的な「統合」や「融合」の実現には困難が伴い、「誰が主体となるのか」という問題が、しばしば争いの深層的な原因となっている。

一方で、実行可能性の高い「融合」は、個人や家庭、国家、人類の多くの場面で現実的に進められている。個人の「適者生存」から家庭の「和睦と幸福」、国家の「調和ある発展」、さらには人類全体の「運命共同体の構築」に至るまで、融合は欠かせない要素であり、その過程には磨き合いと調整が求められる。文学や文化の分野においても、文化的融合は特に重要である。多様性と包容力を尊重し、自由で創造的な活動を促進することで、文化や芸術の発展が可能になる。多様な文化の共存と発展を支える寛容な姿勢が、豊かで持続可能な文化的基盤を築く鍵となる。

鉄凝は芸術家の家庭に生まれ、幼い頃から文学や芸術に親しみ、その薫陶を深く受けて育った。彼女を見守ってきた著名な作家・汪曾祺は、「鉄凝はイングリッド・バーグマンのような気質を持ち、生まれつきの純粹さと気品がある」と述べ、また「彼女は芸術一家に育ち、その環境が彼女の成長に大きく寄与した」<sup>3</sup>と評している。

鉄凝が少年時代に優れた文学的素養と人格的な品格を身につけた背景には、芸術的な家庭環境と明るい教育環境があった。彼女は中学時代から中国・外国の文学名著に触れ、国語の教科書に含まれる文学作品も彼女の感性を養い、自然と創作への道へ導いた。作文を通じて発想や表現力を磨き、特に課題作文「記一次學農勞動」では、6,000字を超える小説的な作品『會飛的鐮刀』を完成させた。この作品を読んだ父親は大いに感心し、著名な作家・徐光耀の意見を求めたことで、彼女はさらなる励ましと指導を受け、文学的探求を深めていった。

鉄凝は後に、15歳の頃の作家になる決意について次のように語っている。「偉大な作家からの評価に心を揺さぶられ、その夜、古蓮池を巡りながら作家になる夢を抱き、必要なすべてを追求すると誓った」<sup>4</sup>彼女はまた、編集者たちからの高い評価と支援を受け、交流を通じて多くの刺激を得た。鉄凝は感謝の気持ちを抱きつつ、絶えず「鼓舞される」力を実感していた。彼女は、人間の美しさ、特に「真・善・

3 汪曾祺著『人間雅量』読者出版社、2022年版、第183頁、第181頁。

4 鉄凝著『讓我們相互凝視』、東方出版中心、2018年版、第74頁。

美」を表現することを誠実に追求する作家であり、その過程で鋭い観察力と豊かな感性を備えた「人民作家」として成長していった。

鉄凝の作家としての成長は、彼女の学ぶ姿勢、包容力、多様な文化的要素を巧みに融合する能力、そして文化的融合を重視する素養に基づいている。作家としての創作主体の形成には、価値観や倫理観の理想的な構築が欠かせない。鉄凝はその過程で「圧倒的なエネルギー」と文化的創作力を獲得したのである。

彼女は自身の創作の資源についてこう述べている。「父は画家、母は音楽をしていたため、私は自然と音楽や絵画に親しみました。それは“栄養”の基盤であり、“資源”ではありません。私が重視するのは、中国の大地の人々や出来事という地に足の着いた本土の資源です。西洋の作家からの影響は、形のない空気のようなものですが、それも欠かせない要素です。本土の資源、個人的な感受性、世界的な視野、そして母語の精髓が融合することが、私の創作の基盤です。」<sup>5</sup>

このような文化的融合の結果として、鉄凝の心にある「文学は灯」というイメージは、古今東西の名作から得た滋養によるものである。それは彼女に光を追い求める憧れと衝動を与え、読書や文学的追求の原動力となった。そして、学歴の壁を越え、卓越した知識人作家として成長した彼女は、中国現代文化史における一つの大きな奇跡を成し遂げたのである。

この揺るぎない信念があったからこそ、鉄凝は困難な時代においても古典文学の読書に熱中し続けることができた。彼女は次のように語っている。

「文学は灯火である。その光が必ずしも眩しいわけではないかもしれないが、たとえ豆火のように小さな光であっても、人の心を照らし、思想の表情を照らすことができるなら、その価値は決して揺るがない。そして、人の心の多くの暗い部分は、文学によって照らされる必要がある…1970年代初頭、中国や外国の文学名著を自由に読むことができない状況の中で、私はあらゆる可能な方法を用いて、トルストイ、ドストエフスキー、プーシキン、プルーニン、チャーホフ、フローベール、ユーゴー、ゲーテ、シェイクスピア、ディケンズ、オースティン、メリメ、スタンダール、カフカ、サルトル、ボル、ヘミングウェイ、アップダイク、川端康成といった多様な作家たちの著作を読み続けた。当時、私は彼らの国に一度も行っていないが、彼らの文学の光が私の心を照らし、私の生活に豊かで繊細な色彩を与えてくれたと断言できる——光があればこそ色が生まれる。そして、中国の唐代詩人である李白や李賀の詩篇、それらの意境や情感は、長い間私の感情に深く浸透し続けている。」<sup>6</sup>

5 於可訓主編『改革開放40年小説百家檔案』第5巻、武漢出版社、2020年版、第1887頁。

6 鉄凝著『以蓄满泪水的双眼为耳』、生活・読書・新知三聯書店、2016年版、第156頁において、鉄凝は次

このように中外の名作を熱心に読み続ける習慣は、鉄凝自身とその文学を形作り、後に彼女が小説、散文、評論（文学芸術評論や講演、報告を含む）に取り組む上で、非常に堅固な基盤を築いたと言える。また、文学倫理学批評体系を構築したことで知られる著名な学者である聶珍釗は次のように指摘している。「文学作品の倫理的価値と美的価値は対立するものではなく、相互に関連し、相互に依存する二つの側面である。美的価値は文学の鑑賞の観点から語られるものであり、倫理的価値は文学批評の観点から語られるものである。私は、文学作品において倫理的価値が第一位であり、美的価値は第二位であると考え。倫理的価値を基盤とする文学の美的価値にこそ意味があるのだ。そして、文学の倫理的価値や道徳的傾向を強調することが美的価値を損なうのではないかと心配する必要はない。むしろ、倫理的価値の欠如が文学作品の美的価値を損なう可能性がある」と<sup>7</sup>。

この観点から鉄凝の文学作品を考察すると、倫理的価値を重視した彼女の創作姿勢は非常に明確である。しかし、それは文学テキストの美的価値と分断されたり対立するものではなく、むしろ緊密に結びつき、一体となり、相互に依存している。その結果、鉄凝の文学は倫理的価値に基づいた美的価値と意義を備えるものとなっている。

文化的な融合に基づいて形成された鉄凝の創作主体は、膨大な知識の宝庫と豊かな美的素養を築き上げた。その中で、文学的倫理の構築は、鉄凝にとって特に重要な意義を持っている。多くの史料が示しているように、高校時代の蓄積、家庭での教育、知青としての体験、農村社会への理解、創作の試行、さらに継続的な学びや日記の執筆の習慣など、これらすべてが鉄凝の着実な進歩と内面的な磨き上げの過程を反映している。これらの要素が、鉄凝の成長にとって重要な推進力となったのである。

しかし、文学創作において「広義の学び」との関係が重要であるとはいえ、それを支えるためには豊かで深い現実生活の経験が不可欠である。この点について、鉄凝は徐光耀から「作家になるためには基層の生活に深く入り込むべきだ」という助言を受け、1975年に高校を卒業した後、保定から100里以上離れた博野県張岳生産

---

のように回想している。「私が作家になりたいという妄想を抱いたのは中学時代でした。私の家族はこの妄想を励ましてくれました。父は私のために非常に長い書籍リストを作成し、閉鎖された市立図書館から禁書を借り出すために奔走しました」（古稻編『江山如画』中国言実出版社、2021年版、第197頁を参照）。鉄凝が中外の文化、特に文学作品に多く触れ、広く読んだことは疑う余地のない事実である。このため、鉄凝の教養を疑問視したり、「現代作家の知識が薄く、世代を追うごとに減少している」といった見解は成り立たないといえる。

7 聶珍釗著『文學倫理学批評及其它·聶珍釗自選集』、華中師範大學出版社、2012年版、第101頁。また、同著者の『文学倫理学批評導論』、北京大学出版社、2014年版も参照。

隊に赴き、知青として農村生活に飛び込む決断を下したのである。

事実が証明するように、鉄凝は知青として農民の役割を立派に果たし、また農民の経験を持つ作家としても成功を収めた。彼女は昼間、農民と同じように様々な農作業をこなし、夜になると灯りをともして読書や思索に励み、机に向かって執筆を行った。この過程において、鉄凝は都市から農村への生活環境の大きな変化に適応する必要があり、自ら意識して内面的な磨き上げと自己鍛錬を重ねたのである。

このような過程を通じて、鉄凝は短編小説『夜路』や『蕊子的隊伍』などを執筆し、それらは次々と多くの文学雑誌に掲載された。1979年、鉄凝は4年間の知青生活を終えて保定に戻り、文化局創作員として創作活動を行うようになった。その後、彼女は河北省文学芸術連盟の専業作家となり、さらに2006年には中国作家協会的主席に選出されるまでに至った。

40年以上にわたり、鉄凝は知青生活で蓄積した素材を次々と小説として執筆・発表してきた。1982年、25歳の若さで発表した短編小説『哦，香雪』が彼女の名を広める代表作となった。さらに1983年には初の中編小説『沒有鈕扣的紅襯衫』を執筆し、同作は峨眉映画製作所によって映画『紅衣少女』として映像化され、大きな話題を呼んだ。1988年には初の長編小説『玫瑰門』が『文学四季』創刊号に掲載された。また、1996年には5巻本の『鉄凝文集』<sup>8</sup>を出版し、その文学的地位を確立した。

21世紀に入ると、鉄凝はさらに多くの優れた作品を発表し、長編小説『大浴女』や『笨花』などを相次いで出版した。2007年には人民文学出版社から9巻本の『鉄凝作品シリーズ』が刊行され、その作家としての豊かな業績が広く評価されている。

中国作家協会主席に就任して以降、鉄凝は文学・芸術分野の管理業務により多くの時間とエネルギーを費やすようになり、そのことが創作活動に明らかな影響を与えた。しかし、全体的に見ると、鉄凝は文学創作と行政管理の双方において、文学への熱烈な情熱を示し、多大な努力を注ぎ続けており、その成果はいずれも驚嘆に値するものである。

文学の道を情熱的に追求する者として、鉄凝は間違いなく成功を収め、非常に高い評価を得ている。孫犁、徐光耀、汪曾祺、雷達、白燁など、多くの著名な作家や評論家が彼女を高く評価している。特に汪曾祺は鉄凝について特別な論評を執筆し、彼女の「非凡さ」を称えるとともに、その容姿まで賛辞を寄せている。しかし、彼女について広く認められているのは、優れた学習能力、特に独学での成功と、若い頃から自覚的に文学の道を歩み続けてきた点である。

8 鉄凝著『鉄凝文集』、江蘇文芸出版社、1996年版。

独学と文学への情熱を持つ鉄凝は、孫犁に通じるような純文学への正直で執念深い追求を続けた。彼女は「上山下郷運動」（知青運動）の厳しい経験を経てもなお、自身の知識体系や感情の基盤を築き上げる努力を惜しまなかった。時代の困難や社会の冷淡さ、中国現代人や現代文学が抱える複雑さにもかかわらず、鉄凝は古今東西の文化の融合を通じて探求を重ね、その全力の努力は豊かな成果をもたらした。彼女は「山の頂に立つ」ような文学の境地に到達し、現代中国文学における重要な地位を確立したのである。

筆者は、鉄凝が間違いなく、現代中国を代表する作家の一人であり、改革開放以降の中国文学史において欠かせない存在であると考えている。鉄凝は特に女性作家として卓越した業績を残し、その総合的な文化・文学素養は、古今東西の文化を「受容」と「融合」する中で培われたものである。彼女は多様な文化要素を効率的に吸収し、再構築することで文学界の際立った存在となり、多様な文化潮流の積極的な融合を体現する模範的な作家であることを証明している。

鉄凝の文学活動には、明確な目的意識と現実的な視点があり、そこには文学への深い愛情と繊細な理解が込められている。彼女は、かつて親しく敬愛していた汪曾祺を思って書いた『生活を信じ、愛を信じる』の中で次のように述べている。

「私はこう言いたい。実際、汪曾祺先生の心は世界に対して完全に開かれていった。だからこそ、物語の小さな枠組みの中であっても、彼は心の大きな風景を描き出すことができた。」<sup>9</sup>

また、第九回作家代表大会の閉会式では、「責任」という言葉を用いて作家としての使命感を共有した。

「再び机に向かうとき、私たちは重くのしかかる責任を引き受けている。」<sup>10</sup>

鉄凝は作家の責任感を重視し、作家が人物の悲喜を描写することの重要性を強調している。これらの姿勢は、中国文学に根付く強力な「文以載道（文学による道義の伝達）」という伝統と深く結びついている。周知のように、中国には「古代」と「現代」の二つの重要な時代区分があり、それぞれに独自の意義を持つ。「大古代」は輝かしくも複雑な文化の歴史を誇る一方で、「大現代」は困難を伴う探求と不断の努力の歴史を象徴している。この「大現代」は、「後古代」としての全ての時代を統合した概念であり、通常語られる近代、現代、当代を統合的かつ調和的に捉える視点を提供する。これにより、「大現代」の視野は、中国が近代化を追求し続ける過程をより包括的に反映している。

9 鉄凝著「相信生活，相信愛」『人民日報』、2010年3月24日。

10 湯詩瑤・陳苑著「再读鉄凝」『人民週刊』、2016年、第24期。

中国の「大現代」文化とは、古今の融合と中外の影響を集成した多様性に富む文化を指す。具体的には、古代文化の継承と発揚、世界文化の受容と消化<sup>11</sup>、さらには国際的な文化発信の強化が含まれる。

こうした文化的背景と歴史的プロセスの中で、中国文学には「鉄凝現象」が誕生したのである。

鉄凝の文学的成果とその伝説的な物語は、多くの注目を集め、さまざまな視点から語り直され、新たな意味が付与され続けている。それに伴い、「鉄凝文化現象」（多様な評論や研究、小説の映像化、メディアによる発信など）も豊かに広がり、この現象自体が多角的かつ深く掘り下げて研究される価値を持っている。

では、このような傑出した作家はどのように生まれたのか？

一文化人としての鉄凝は、古今東西の文化の融合を通じて徐々に形成されてきた。その人文的な世界観も、多様な文化が交わり磨き合う中で作り上げられている。日常生活や社会活動において探究者であり実践者でもある鉄凝は、文化融合がもたらす知恵や忍耐力を糧にしてきたが、同時に文化的な摩擦や矛盾、時には誤解や葛藤も避けることはできなかった。その過程で、文化融合から生まれる独創的な創造力と、課題に向き合う姿勢が彼女の基盤となった。

鉄凝の知識体系は、古今東西の文化的知識の蓄積によって構築されている。彼女の思想や文学的視点は、伝統文化と外来文化が融合し啓発し合う中で形成された。また、民衆の日常生活や現実の文化から得た豊かな体験や示唆、強烈な刺激も、彼女の創作活動に大きな影響を与えている。

鉄凝はこれらの要素を融合させ、文化的な力へと昇華させることで、国家の発展や人民生活の現代化を推進しようと試みた。彼女の文学観は、古今東西の文化が磨き合う文脈で形成されたものであり、具体的な状況や背景と調和した文化的特徴を備えている。たとえば、『求是』や『人民日報海外版』などに掲載された彼女の論

---

11 鉄凝は多くの外国作家に精通しており、幾人かの優れた作家に強い敬意を抱いている。また、彼女はこれらの作家について鋭い洞察を示してきた。例えば、北京の英国大使館で開催された「ディケンズの夜」という世界的な文学記念イベントに参加した際、鉄凝は自身が9歳の時にディケンズの作品を読んだことがあると述べ、さらに次のように強調している。「ディケンズの最も貴重な意義は、彼が現実と直面するだけでなく、卓越した洞察力によって苦痛を描き出した点にある。同時に、彼はなおも愛を信じ、善良さを信じ、未来に対する最も純粋な楽観主義を信じていたのです」（朱玲「鉄凝：彼は残酷さに向き合いながら善良さを洞察できる人物だった」『北京青年報』2012年2月8日）。

また、鉄凝は著書『女人の白夜』の中で、ドストエフスキーの『白夜』を若い頃に読んだことが、自身に深く、長く影響を与えたと述べている（遲子建ら著『平凡な生活も輝きを放たせるべきだ』北京聯合出版公司、2023年版、第116頁）。このように、鉄凝は外国文学からの影響を自身の文学的成長に取り入れ、それを独自の視点で語り続けている。

考には、彼女の文学観が色濃く反映されている。<sup>12</sup>

## 二、融合と叙事：鉄凝が築いた文学世界

鉄凝は、絶え間ない文化的融合と生活経験の蓄積を通じて、「後古代」、すなわち「大現代」という時空の中で自身の文学観を築き上げてきた。彼女は追求する文学的目標を明確にし、持続的な創作活動を通じて独自の個性が際立つ文学世界を構築している。その文学世界には、「大現代」の文化観が色濃く反映されており、以下の三つの特徴が際立つ。すなわち、古今の変化を貫く視点、中外文化融合の広がり、そして人類愛から生まれる思想と芸術の統一である。鉄凝の文学的叙事は、これらの特徴を通じて文化的融合の成果を見事に表現している。

文学評論家の陳曉明は、鉄凝の初期の成功を次のように総括している。

「作家・鉄凝はまさに若くして成功した人物だ。23歳で小説集『夜路』を出版し、その流麗で明るい文体は人々を驚かせた。芸術一家に育った鉄凝の初期作品には、独特の清らかさが表れており、特に『哦，香雪』は文学界に鮮烈な印象を与えた。その後、彼女の創作は次第に豊かになり、当時の社会における個性解放の象徴となった議論を呼ぶ作品『沒有鈕扣的紅襯衫』や、知青（下放青年）の生活を異なる視点から描き高く評価された『麥秸垛』などを発表した。この時期の鉄凝の小説のテーマは、地方や都市の普通の人々が生活空間や内面の狭さからどのように解放され、より開かれた文明的な生活へと向かうかという点に一貫していた。その後、鉄凝は長編小説の執筆に転じ、次々と大作を発表した。『玫瑰門』『無雨之城』『大浴女』などの代表作では、壮大な時代の歴史を背景に、その時代を生きる人々の物質的・精神的困難を繊細に描写している。これらの作品には、司猗紋、姑父（おじ）、尹小跳などの印象的な登場人物が登場し、鉄凝の文学世界に深みを与えている。2006年に出版された『笨花』は、広大な歴史の中に埋もれた小さな物語として、農村の歴史を細やかに描いた。この作品では、農作物の栽培や祭りの風習、婚姻や葬儀といった伝統文化、そして風土や人情、家族の運命や村の興亡が、中国近代性を支える革命の歴史と密接に結びついている。『笨花』は、個人と集団、過去と未来の交錯するドラマを通じて、文化と歴史の深層に迫る文学作品として評価されている。鉄凝が本当に生き生きと描くのは、人情味あふれる小さな物語である。彼女の作品

12 参照：鉄凝「新时代中国文艺的前进方向」『求是』2019年第1期、「歌以咏志 星汉灿烂——写在文艺工作座谈会召开十周年之际」『求是』2024年第10期、「江山多胜迹 炳耀新文明」『求是』2023年第22期、「坚定文化自信 履行文化责任」『人民日报海外版』2017年10月25日、など。

には、人間の本質を描き出す率直さと、細やかな心理描写が特徴的であり、それが作品全体に躍動感を与えている。歴史は彼女の筆によって柔らかく絡み合い、その繊細な表現が歴史の真実をより鮮明に浮かび上がらせている。<sup>13</sup>

鉄凝は、初期の流麗で明るい叙事から、新世紀初頭には「大きな歴史の中の小さな叙事」へと進み、さらに性別や時代を超えた壮大な叙事へと視野を広げてきた。彼女の作品は、普遍的な人間性の健全さや調和の取れた発展を追求しており、文学世界に深い哲学的意義をもたらしている。また、彼女のエッセイは、糸のように途切れることなく連続性を保ちながら、泉のように新たな視点や鋭い評論が湧き出している。これらは、鉄凝が数十年にわたり文学創作に全身全霊を注ぎ続けた輝かしい成果を物語っている。彼女の多くの作品は書店のベストセラーであり、ロングセラーとしても親しまれている。また、彼女の作品は多くの外国語に翻訳・紹介され、世界各国で広く読まれている。<sup>14</sup>さらに、彼女の作品は研究者によって深く分析され、既に現代文学史の中で確固たる地位を築いている。そしてその評価は、現在も新たな研究によって書き加えられ続けている。

鉄凝が描く文学世界は、多彩で豊かであり、叙事技法の多様性も際立っている。彼女の数多くの小説や随筆には、豊かな内容と鮮やかな芸術的色彩が備わっている。初期の執筆段階において、彼女の短編小説『夜路』や『蕊子的隊伍』などは、20世紀70年代の「純粹」な光と影を映し出している。1980年代になると、彼女の生活における真善美、特に美しい女性の感情世界の表現が、彼女の文学的特色を形作るようになった。1982年には、鉄凝は自身の出世作『哦，香雪』を発表し、翌年には中編小説『沒有鈕扣的紅襯衫』を発表した。同時に、この作品は時代を映す改編を経て、『紅衣少女』という名前で映画化され、鉄凝および彼女の小説の影響力を大いに広めることとなった。その状況は、路遥の『人生』およびその映画化による反響の大きさと非常によく似ている。

鉄凝は、多くの同時代作家と同様に短編から長編へと歩みを進め、1988年には初の長編小説『玫瑰門』を発表した。彼女はその作品で、まるで高原の大樹のように文学界にしっかりと根を下ろした。鉄凝の文学は「量の多さ」ではなく、「質の高さ」で読者を魅了している。『無雨之城』『大浴女』『棉花花』『玫瑰門』『洗澡的女人』『麥秸垛』『孕婦和牛』『棉花之花』『永遠有多遠』『火鍋子』など、美しい作品が次々と生み出され、日常生活の美や女性の心の美を発掘する点において、時代の最前線を歩んでいた。

13 陳曉明「主持人語」『新文学評論』2021年第1期。

14 参照：張炯主編『中国現代小説史（上）』、山西教育出版社、2022年版、第424頁。

特に、長編小説『大浴女』と『笨花』は世間の注目を集め、評論界でも広く議論され、中国現代文学における重要な地位を確立している。

鉄凝の作品では、北京の路地に住む少女・白大興の物語が丹念に描かれる。純粹で愛らしい性格で人々に愛される彼女だが、その克己心や寛大さは、必ずしも望む愛をもたらさず、自己犠牲が裏切りに終わることもある。それでも彼女の最後の選択は予想外であり、人々を驚かせる。それは「魂の向上」を追求する姿として描かれている。鉄凝は「魂の向上」を巧みに表現することで、文学作品の魅力を高めると同時に、文学倫理の深みをも追求している。彼女の登場人物たち（例えば、『午後懸崖』の韓桂心、『對面』の「私」、そして『大浴女』の尹小跳など）は自己反省を通じて魂を高め、墮落を避けようと努める。この「魂の向上と墮落回避」というテーマは、鉄凝が生活の追求と叙事の追求を統合しようとする文学的努力の現れ、最終的には、限りない大愛に満ちた「清澄」の境地に至る。

鉄凝は次のように語っている。

「本当の清澄とは、単なる明快さではなく、人生への真の思いやりと愛情が、多くの苦難や破壊、さらには地獄のような体験を経ても沈まず、何度も浮かび上がる場所にある。最後に到達する境地こそが澄明である。最初から一直線に目的地にたどり着くことは、偽りであり、軽薄であり、不可能であり、現実的ではない。」<sup>15</sup>

こうした物語手法を基盤に、鉄凝は人物描写や物語構成に心血を注ぎ、物語の合理性や心理の真実性に一層の注意を払った。物語の筋の合理性、心理の真実性、そして表現における筆致の分量の調和に一層重きを置くようになった。

いわゆる「朱に交われれば赤くなり、墨に交われれば黒くなる」ということわざは、鉄凝の場合にも証明されている。両親が芸術家であったこと、そして徐光耀や孫犁といった作家との交流は、彼女の文学的成長に多大な影響を与えた。少年時代の鉄凝にとって、孫犁は偶像のような存在であり、彼女も多くの文学青年と同じように、孫犁の文章がもたらす喜びに夢中になっていた。その後、鉄凝は孫犁と数回会い、交流する機会を持った。彼女の自信作である『灶火的故事』は、他の先生たちにはあまり評価されなかったが、彼女は思い切って孫犁に送った。孫犁はすぐにこの小説の発表を手助けしてくれた。この出来事は鉄凝にとって大きな励みとなり、彼女を「荷花淀派」の文学世界へと導き、「詩化小説」の叙事伝統により深く接近し、それを広めるきっかけとなった。<sup>16</sup>

15 于可訓編：《改革開放40年小説百家档案》第5巻、武漢出版社、2020年版、1886頁。

16 参照：苗雨時編『蓮花淀派研究資料彙編』（上下巻）、花山文芸出版社、2021年版、384ページ。実は、鉄凝は青少年時代に数十編の詩を執筆しており、詩に対して一定の素養を持っていたことが、彼女の文学言

鉄凝にとって孫犁は、人民から離れることなく庶民に寄り添う「人民の作家」の象徴であった。鉄凝は、4年間の下放生活が自らの人生と執筆に与えた影響について、次のように語ったことがある。

「農村は学校から社会への最初の拠点であり、生活や労働を通じて、ある老作家が言った『少女の心には人類の原初的な美徳が埋め込まれている』という言葉の正しさを実感した。」

農村生活の中で鍛えられた彼女は、人生の苦難の中で強さと温かさを失わないことの重要性を学んだ。こうした経験が、鉄凝の文学観を大きく形作った。

鉄凝は、「作家は魂の墮落や闇、悲しみを書くことができるが、最終的には魂を昇華させる力を持たなければならない」と考え、文学の最終目的は世界に思いやりや温かさをもたらすことだと信じていた。温かさを描くことは容易ではなく、鋭い洞察力と大いなる慈悲心を必要とするが、それは現実への批判精神を放棄することを意味しない。鉄凝はこう信じる。

「作品に光と熱が必要ならば、まず作家自身の心に光と熱がなければならない。文学は世界を温める力を持つべきである。」<sup>17</sup>

鉄凝の人格、気質、寛大さ、人文学的思考は、彼女の人柄と作品に驚くほどの一体感をもたらしている。彼女の優雅さと純粹さは、創作だけでなく「社会奉仕」の行動にも表れている。たとえば、多くの国内外の文学賞を受賞してきた鉄凝は、中国作家協会の指導者になって以降、自身の作品を協会主催の文学賞に応募しないことを明言した。この冷静な判断は、より高い文学の境地を追求する姿勢であり、崇高な文学倫理観を体現している。<sup>18</sup>

鉄凝の作品には、彼女の繊細で美しい心が如実に反映されている。『隠匿の大師』『讓我們相互凝視』『以蓄滿淚水的雙眼為耳』『海姆立克急救』などの作品や、国内外の師友を回想した随筆は、その代表例である。

性描写においても、鉄凝は純正な文学観を貫いている。彼女は次のように述べている。

「性の意味は非常に広く、母性愛的なものが含まれている。…土地、作物、女性との密接な関係は、永遠に変わらない母性にある。母性は私たちが養い、育て、

---

語に詩的な性質を与えた要因の一つである。将来的にこれらの詩が公開されれば、学術研究に新たな史料を提供する可能性がある。

17 付小説（記者）：『『文学は世界を温める力を持つべきだ』』、『光明日報』、2006年12月11日。

18 鉄凝の長編小説『笨花』は、第7回茅盾文学賞の候補作品として推薦され、多くの人々から最有力な作品の一つと見なされていた。しかし、鉄凝は果敢に「辞退」を決めたため、「茅盾賞」を逃すこととなった。それにもかかわらず、この決断により、彼女はさらに高い評価と好評を得ることとなった。

最も困難で不安定な時に安らぎと支えを感じさせてくれる。」<sup>19</sup>

鉄凝の農村三部作「三塚シリーズ」(『麥秸塚』『棉花塚』『青草塚』)では、登場人物たちの純粹で芽生えた性意識が巧みに描かれている。大芝娘(『麥秸塚』)、米子(『棉花塚』)と十三苓(『青草塚』)といったキャラクターたちは、それぞれ異なる形で性意識を表し、生命のリアルな姿を映し出している。特に、苦難や性愛の利己性を超えた質朴で広大な愛の描写は注目に値する。鉄凝の筆致による性描写は、清純で美しく、曲徑通幽(間接的かつ繊細な描写)であり、精緻さが際立っている。しかし、時には女性の立場に基づき、倫理的・道徳的な裁きを加えることもあり、もう一つの「純粹さ」を表現している。小説『遠域不陌生』では、女子大学生の郁南妮と既婚男性の蘇懷胄の不倫関係を通じて、感情のもつれや虚偽を鋭く描き出している。鉄凝は「物語上必要であれば、性描写を忌避せず、自然体で描く」と語り、その信念を次のように述べている。

「性は非常に露骨に描くこともできるが、真剣な文学においては、人間の精神生活と結びつき、清らかで美しく描かれるべきである。」<sup>20</sup>

鉄凝の作品には、こうした文学観が一貫して反映されている。性描写に限らず、罪悪感を抱える登場人物を描く際にも、醜悪さや罪深さをあからさまに表現するのではなく、前向きな方向へ導こうとする姿勢が特徴的である。「悪に向き合い、善へ進むべきだ」というメッセージが、彼女の作品全体に通底している。この姿勢は、『無雨之城』『大浴女』『何咪兒尋愛記』『永遠有多遠』『孕婦和牛』など、多くの作品に表れている。

これらの作品では、不倫、伝統的道徳への挑戦、愛や性の欠如した結婚、浮気を容認する賢妻、母親の不倫、愛を求める執念、独占と快樂を追求する男性、自由奔放だがトラブルを引き起こす女性など、性をめぐる多様な人間模様が描かれている。これらは現代社会が抱える問題、特に女性に関する課題を鮮明に浮き彫りにしている。

その中でも、重要な作品である長編小説『大浴女』では、純粹で優しく、自己反省と自尊心を持つ新しい女性像として、主人公の尹小跳を描き出している。また、彼女の妹・尹小帆や友人の唐菲、孟由由といった、性格や運命の異なる女性たちも生き生きと描かれ、それぞれが現代女性の多様性を表現している。

『大浴女』は現代の「懺悔小説」として位置づけられ、主人公・尹小跳の自己反省を軸に、若者たちが世俗的な悩みや迷いから解放され、「心の奥の庭園」へと向

19 于可訓編：《改革開放40年小説百家档案》第5卷、武漢出版社、2020年版、1884頁。

20 于可訓編：《改革開放40年小説百家档案》第5卷、武漢出版社、2020年版、1885頁。

かう過程を描いている。この作品を通じて、鉄凝は「性をどう描くか」という倫理観と美的表現の統一を見事に体現している。<sup>21</sup>

### 三、磨き上げと確立：鉄凝の自己実現と「三立」の人生

鉄凝は、「立人」「立家」「立象」の三つの側面で大きな成功を収めた。これは、自己実現を果たし、個人・国家・民族・人類といった異なるレベルで業績を上げ、作家としての気質と風格を高い次元で形成したことを意味している。

「立人・立家・立象」の中で、「立人」は鉄凝個人の成長と成功、特に女性の自立と自強を意味している<sup>22</sup>。「立家」の道は曲折を経ながらも、「名を成し家を立てる」ことにとどまらず、小さな家庭、大家族（集団の家）、さらには国家や人類の家園を両立させることを含んでいる。「立象」は伝統的な「言葉による形象表現」ととどまらず、文学創作の昇華と飛躍を実現している。鉄凝の所作や気品、非凡な気質が形作る作家としての風格、女性としての美しさ、庶民に寄り添う善良さなども、人々に非常に深い印象を与えている。河北の郷里の人々からは「小説が上手く、美しい容姿」<sup>23</sup>と評されることもあるが、実際には鉄凝の「心の善さと美しさ」こそが、より根本的で重要な要素である。

鉄凝は人生と文学の両面で驚くべき執念を示し、「立家」の追求の中には、彼女の人生の理想や文学的目標に対する「上下求索」（あらゆる努力を尽くして探求する）の精神が反映されている。実際、「三CAI兼備」（才華が際立ち、財力が豊かで、体格が立派）の華生君こそが鉄凝の理想の伴侶であり、彼女が半世紀待ち続けた「もう一人の半身」だと言われている。鉄凝に関する逸話や伝説はさまざまなバージョンで語られているが、「華生」という名前の人物が確かに存在することは事実だ。彼は、経済学や文学における優れた才能を持ち、創造力や財力の卓越した能力を誇り、さらに「材料」も豊かである（豊富な人生経験を有し、体格は堂々としており、端正な容貌もその「資質」の一つとされている）。このように「三才兼備」

21 参照：賀紹俊『鉄凝評伝』、鄭州大学出版社、2004年版、188-189頁。

22 鉄凝の『ボタンのない赤いシャツ』や『何咪几の愛を探す物語』などの小説では、新時代の青年女性像を個性豊かに描き出し、「中国式現代化」の進展を「文学化」された形で証明している。安然というキャラクターが人気を博したのは、改革開放と思想解放の時代背景の中で、彼女が人々の率直さや自由な個性への憧れに見事に応えたからである。また、何咪几は愛を探す過程で、非常に率直で、一途で、そして勇敢な姿を見せている。鉄凝自身も、「この女の子には止めどない力があって、とても貴重だと感じる」と述べ、このキャラクターに深い愛着を持っていた。参照：于可訓編『改革開放40年小説百家档案』第5巻、武漢出版社、2020年版、1881ページ。

23 秦景棉：『春水』、文化発展出版社、2020年版、172ページ。

の実力を持つ華生君だからこそ、鉄凝は終生を託すにふさわしいと考えたのであろう。この執筆を機に、筆者は現代中国における「鉄華の恋」に心からの祝福を送りたい。

筆者の見解では、「大現代」文化の視点から鉄凝を考察する際、さまざまな学者が多様な意見を表明することを許容すべきである。豊かで複雑な文化的名士には議論がつきものだが、それと比較すると、鉄凝はその純正さと控えめな姿勢によって、持続的な良好な評価を保ち、論争が少なく、極端に鋭い批判を受けることはほとんどない。彼女が慎重であることは、「鉄凝文学館」や「鉄凝研究センター」の設立を支持しなかったことから明らかである。鉄凝はまさに「女神」の風格と奉仕の精神を備えた現代文人である。

彼女は中国現代文化の建設において、絶えず探求と道の開拓に努めてきた。そして単に道を切り開くだけでなく、その道を歩みながら樹を植え、主に「文学の常緑樹」を通じて、人を育て（樹人立人）、文化を立て（樹文立象）る役割を果たしてきた。また、伝統的な文人の「三立」（立言、立德、立功）を基盤に、魯迅先生のように「新三立」という現代文人の人生世界を構築し<sup>24</sup>、非常に高い人生の境地に達している。

もちろん、彼女は民国時代の「自由文人」とは異なり、非常に強い組織観念と現実的な必要性への意識を持っている。当代の多くの学者や評論家も、魯迅などの入世文人に注目するように、鉄凝とその作品にしばしば関心を寄せていると言える。そして、まさに鉄凝が私たちにこの時代の特別な視点を与え、人生を解釈するための非常に豊かなリソースを提供してくれたことに感謝し、彼女に注目し、研究を進めるべき理由があると言えるだろう。<sup>25</sup>

そして、創作力とリーダーシップを兼ね備えたこの鉄凝という女性の豪傑を、いかに世界規模で広めるかは、まさに現代における世界的かつ時代的な命題である。この命題は、国家の壮大な課題とも一致している。それは「いかにして世界が中国をより深く認識し、理解するようにするか」という問いであり、そのためには中華文明を深く理解し、歴史と現実、理論と実践を結び付けた観点から、中国の道をよりよく堅持し、中国の精神を発揚し、中国の力を結集する方法を徹底的に解明する必要がある。<sup>26</sup>

24 参照：李繼凱：「略論魯迅の『新三立』と『不朽』」、『魯迅研究月刊』、2013年第9期。

25 参照：杜桂萍：「杜桂萍談枕辺書」、『中華読書報』、2021年5月11日。

26 参照：习近平：《习近平给<文史哲>编辑部全体编辑人员的回信》，新华网，

[http://www.xinhuanet.com/2021-05/10/e\\_1127428330.htm](http://www.xinhuanet.com/2021-05/10/e_1127428330.htm)

鉄凝は現代中国の文人作家を代表する傑出した人物として、その独学への没頭、西洋と東洋を結びつける視点、そして一貫した努力を続けてきた。彼女の文化的・文学的 pursuit は、唯実唯美を基盤とし、理想を崇高に掲げ、童心を失わず、初心を守り続ける姿勢が特徴的である。それは今なお一筋の光のように、召喚と激励の力を持つ文学の道を照らしている。

鉄凝の出世作『哦，香雪』では、詩化小説の筆致を用いて、山村の少女たちが列車を見て、列車に憧れ、美しい生活を夢見る物語が描かれている。山外から次々と走り来る列車は、彼女たちを父母の世代が街角でぼんやりと座るしかなかった窮屈な生活から解き放ち、青春を大山の皺の中に埋もれさせることを拒む新たな意志を芽生えさせる。新たな追求のために、彼女たちは行動を起こす。熱愛と希望、強さと情熱、素朴さと活発さ、そして優しさと大胆さを持ち、大山が授けたあらゆる美德を携えて、勇敢かつ執念深く新しい生活へと歩みを進める。その姿は一途そのものである。この紹介は鉄凝自身が『哦，香雪』について語ったものであり、同時に山村に住む「小さな少女たち」への彼女の美しい想像が透けて見える内容でもある。<sup>27</sup>その中には、現実とロマンの融合があり、透明な心境と情熱が込められている。「生活は変わり、生活の中の人々も変わっていく。それでも、私たちには香雪が必要だ」と言えるのだ。<sup>28</sup>

鉄凝は「香雪精神」について次のように語ったことがある。

「私はこう考えています。生活は完全に香雪のようなものではありませんし、そうであるべきだという要求も不適切です。しかし、香雪とは何でしょうか？それは人間の魂の中で最も柔らかい部分であり、最も貴重な存在です。将来的には香雪ではなく、別の人物かもしれません。例えば司猗紋ですが、彼女の魂の中の、誰にも気づかれない小さな片隅に香雪の一部が宿っているのではないのでしょうか。きっとそうだと思います。ですから、香雪の精神、香雪が意味するところの人間の魂の中の清澄で柔らかな部分は、文学によって呼び起こされるべきなのです。」<sup>29</sup>

鉄凝が描く最も複雑な女性像である司猗紋の中にも、決して消えることのない香雪精神が宿っている。このこと自体が、鉄凝が文学の理想と文学倫理に対して持つ深い理解と、その不懈の追求を如実に示している。

たとえ、人間性の歪曲や女性の異化を描いた重厚な長編小説『玫瑰門』においても、生活の惨烈な側面をあらわにしながら、そこにはポジティブなエネルギーの伝

27 参照：『文学報』編集部編『大作家写给老师的文学课』、青岛出版社、2021年版、11-12頁。

28 于可訓編：《改革開放40年小説百家档案》第5巻、武漢出版社、2020年版、1878頁。

29 于可訓編：《改革開放40年小説百家档案》第5巻、武漢出版社、2020年版、1880頁。

達と善良さへの見守りが込められている。鉄凝は社会や生活の様々な変化に常に関心を寄せてきたが、それでもなお、彼女は文学を愛する「初心」と「根底の色」を守り続けている。

彼女はインタビューで、次のように自身の思いを語る。

「私は思うのだが、誰の生活や魂にも“底色”があるように、文学にも“底色”がある。この変わらない底色こそが、私が文学について初めて抱く認識なのだ。私の心にある文学とはどのようなものだろうか。それは人類に対する大きな思いやりと愛だ。一見すると簡単なことに思えるかもしれないが、実際にはそれを成し遂げるのは非常に難しい。この人類に対する大きな思いやりと愛、そして永遠に疲れることのない情熱は、必ずしも香雪のような形で表現されるわけではない。多くの人が『バラの門』を読んで身震いし、あのような不美で歪んだ女性像を受け入れられないかもしれない。しかし、実はこの中にも生活に対する尽きない思いやりと愛が込められているからこそ、作品には怒り、失望、悲しみ、そして問いかけがあるのだ。もし愛と希望すらなければ、失望も存在し得ず、さらにそれを表現することすらできない。」<sup>30</sup>

つまり、『玫瑰門』にも「愛と希望」が含まれており、その中に「香雪精神」の微かな光が秘められている。鉄凝のような創作主体に向き合うとき、読者は最終的に高尚、清明、純正、婉約、清麗、超然、凝重、深沈、和諧、質朴、宏大といった複雑でありながらも美しい印象を抱く。そして、そうした印象の中で「立象」の意義においても、「鉄の女」鉄凝の存在を無視することはできない。

文学の道における重要な節目で、鉄凝は作家としての強い「入世精神」と「責任意識」を持つ必要性をたびたび強調する。彼女は高い地位にあっても、「人民への愛」「天使のような愛」の代弁者として語り、その言葉には真心がこもり、建前だけのものではない。時には全体的な見解を述べ、時には特定の側面を強調する。

鉄凝の考えによれば、文芸に携わる者がすべきことは次の通りだ。第一に精神を振るい立たせること、第二に集中力を持つこと、第三に創作に専念すること、そして第四に勇気を持って責任を果たすことだ。また、私たちの民族特有の優雅な精神遺産を大切に、それを継承すること、自分の魂を磨くことも必要だと強調する。これらを実践することで、時代とともに歩み、大時代に恥じない傑作を生み出すことが可能になるのだ。

例えば、『哦，香雪』『沒有鈕扣的紅襯衫』『玫瑰門』『永遠有多遠』『大浴女』『笨

30 于可訓編：《改革開放40年小説百家檔案》第5卷、武漢出版社、2020年版、1879頁。

花』といった作品はいずれも時代の進展を反映する象徴的な作品であり、学界や一般読者から熱い関心を引き起こす。一部の学者が述べるように、「生活や時代の変化を細やかかつ鋭敏に感知し、それを真摯に捉え、真剣に表現したことで、鉄凝の作品は新時代以降の文学発展のあらゆる段階で鮮明な足跡を残す。その創作全体を見ると、青春の詩情、成熟した情熱、知的なユーモアがある一方で、冷徹な省察、厳しい問い、深い分析があり、創作の進化は作家としての豊かな表現力と創造力を示す。また、各段階における思考の焦点の変遷も明らかだ」<sup>31</sup>と評される。

実際、鉄凝は純粹でありながらも単一的でも単調でもなく、彼女の精神世界の豊かさや文化的個性は「凸円形構造」を持つ。その中には、長期的に広い視野と多様なスタイルを保つ一方で、文学倫理の高さと深さを追求する姿勢が含まれる。それは道徳や倫理の問題に対する彼女の不断の深い思索と表現を内包する。また、言葉遣いや文章作成においても、彼女は自らに厳しい要求を課すのだ。

現時点で見ると、鉄凝の人生の追求と文学の追求は、現代文人が到達し得る最高の境地、あるいは頂点に達する。人々の価値判断にはさまざまな基準や参照軸があるにせよ、歴史的、社会的、そして主流的な視点から見ると、鉄凝はすでに、あるいはほぼ「大現代」文人の「新三立」を実現したと評価される。すなわち、上述したように、鉄凝は大現代文化の次元で「立人」「立家」「立象」を成し遂げ、それによって多くの文人が憧れながらも達成するのが難しい人生の高みへと到達する。

古今東西の文化が融合して現代へと変わる過程では、さまざまな形態の文化的調和が貫かれる。近代以降、多くの文化的名士や著名な作家たちは、この文化的調和の中で自身の文化観や価値観を徐々に形成し、それに基づいて文学的追求を展開してきた。鉄凝もまたその一人だ。「後古代」の歴史的新時期、新世紀において、鉄凝は古今東西の文化的調和を通じて自らの文学的追求を展開し、「三立」の人生と文学の世界を創造的に形作る。その結果、彼女は中国現代における最も象徴的な代表作家の一人となる。

鉄凝は、接触した古今東西の文化的思想資源を絶えず受け入れ、それを創造的に調和させ、統合することで独自の文芸観念を形成する。その過程で、何度も語り草となるような文学的追求を展開する。明らかに、単一の文化的資源だけでは、これほど豊かで卓越した鉄凝は生まれ得ない。まさに多元的で多様な文化が出会い、調和することで鉄凝という存在が完成されると言える。彼女は「世界文学」を受容する過程で世界へと歩み出し、その成長の軌跡は、読書を励みとし、創作を通じて社

31 趙魅：「罪與罰——關於鐵凝小説的道德倫理敘事」、《小説評論》、2004年第1期。

会に貢献する意義を示すものとなる。また、広い視野と包容力のある精神を持つことの重要性を教える、多くの啓発的な側面を備える。